

本論文は「中国語における情報源の表出」を中心テーマとして、①中国語には文法範疇としての証拠性を持つ「証拠素」、もしくはそれに近いものはないか、②中国語の母語話者は何を手がかりにして情報源を理解するのか、といった問いを念頭に置き、従来の研究を踏まえつつ、中国語の言語事実を合理的に説明できる情報源の表出に関する枠組みを探り、一部の構文・機能語の成立のメカニズムを情報源表出の視点から解明するものである。

本論文は9章から構成される。第1章は文法範疇としての情報源とはどのようなものであるかを示したうえで、問題提起と論文の主たる主張を述べた。第2章では証拠性に関する先行研究の概観を行い、一般言語学の立場から証拠性の枠組みを提案した先駆的な論考と証拠性の概念を用いて中国語の事例を考察・分析し、その上で、中国語を対象にした、従来の証拠性の研究の問題点として、①「情報源」と「情報源の信憑性」と「情報の信憑性」の混同、②カテゴリとしての「証拠性」という意味において表出される情報源を認定する基準の不明確さの問題が存在していることを指摘した。第3章では証拠性の理論的枠組について整理し、「情報源表出形式」を「証拠素」・「証拠構造」・「証拠策」の3つに分類し、文法範疇としての証拠性の有無は、証拠素の有無によって決まるとしたうえで、中国語（共通語）において証拠構造は主に動詞句によって構成され、実証的情報源は感覚動詞から、推論的情報源は思考動詞から、伝聞的情報源は伝達動詞からなるのが一般的であり、文法範疇としての証拠性を表す「証拠素」の認定基準に合致する形式には“说是”のみが存在し、実証的情報源と推論的情報源を示すのに、証拠策が複数存在していることが認められることを指摘した。そのことから中国語は2選択の証拠性システムを持つ言語であると結論づけた。第4章では「証拠素」の“说是”を取り上げ、それが発信者指向から受信者指向に移行し、動詞から脱範疇化したものであると指摘し、伝達動詞が〈伝聞〉の証拠素へと変容していく過程を詳細に記述し、明らかにした。第5章と第6章ではそれぞれ中国語の方言である呉語に属する上海語と閩南語に属する台湾語における〈伝聞〉を表す形式の派生義について、情報源の表出に関連付けてその変容の過程を分析した。そこでは上海語の“伊讲”は〈直接経験〉に由来している情報を表す文の文末に現れ、話し手側の意外性を表す形式になったとし、台湾語の“讲”は聞き手が情報を知った瞬間に感じるはずの意外性を想定し、聞き手に「注意喚起」を促すと説明した。第7章では上海語の“勳太AP 噢”を取り上げ、“勳”は制止を表す否定副詞から、「危惧-認識のモダリティ」の段階を経て蓋然性を表す認識的モダリティの形式になり、〈推論〉の情報源を含意し、その“勳”

の直後に〈直接経験〉の情報を要求する“太～噢”が生起すると、推論の意味が抑えられ、「感嘆」という強意の訴えかけの構文となったことを明らかにした。“伊讲”、“讲”、“勳太～噢”の事例から、中国語における証拠素をはじめとする情報源表出形式の意味機能の拡張は、〈直接経験〉に用いられることを要因として、対人的機能へとシフトする傾向にあると結論づけた。第8章は他者に内在する状態への言及を焦点に当て、その情報源の表出の有無を考察した。データ調査の結果に基づいて、中国語において他者の内在する状態が多くの場合内在的状态の主体が他者であるか否かを問わず、同様の無標の形式で表出されるが、一方で情報源を特定化するような形式・ストラテジーもいくつか見られることが判明した。その場合、表出される情報源は（話し手自らの体験ではなく、五感による）〈知覚〉と〈推論〉である。内在的状态の主体が他者であることをより明白にするのが、これらの形式・ストラテジーを用いる一つのモチベーションである。また、情報形成への話し手の参与を最小限にすることによって、情報の真実らしさについての話し手の責任の回避を図り、〈推論〉の情報源を意図的に表出することが考えられ、そこから伝達される内在的状态に対して、話し手の断定保留ないし否定的態度が読み取れることを明らかにした。第9章では、各章の主な結論をまとめ、更なる一般化を行った上で、今後の課題を提示した。

論文を通じて、証拠性は中国語の具体的な現象を分析する際にも有効であることを証明し、これからの証拠性に関する研究は中国語をも視野に入れるべきであると主張した。

以上、本論文の学術的価値を述べたが、本論文の最大の貢献は何と言っても、中国語において、「情報源表出形式」として、従来あまり厳格に区別できなかった「証拠素」・「証拠構造」・「証拠策」を理論的に確立し、具体例を通して明らかにしたということであろう。

とはいえ、論文に不備や問題がないわけではない。審査委員から文法範疇としての証拠性を表す「証拠素」が伝聞に対応する副詞において、わずか一つしかなく、しかもそれが伝聞表現を構成する十分条件でないということに基づき、中国語の分析における「証拠素」認定の妥当性を問う質問があり、またいくつかの用語に関しては厳密さを欠き、より明確に基準を示すべきであろうという指摘があった。さらにいくつかの誤植や例文の訳の間違いなども指摘された。しかし、これらの指摘は本論文の学術的価値をいささかも否定するものではない。

このように、本論文は指摘されたような不備を残しつつも、従来この分野の研究に見られないような視野の広さ、洞察力の深さ、分析の適確さを持つ、学術的価値の極めて高い研究であり、今後この分野の研究においては欠かすことのできない必読文献であるに違いない。また、公開審査会の質疑応答においても、李佳樑氏はすべての質問に適格に回答し、その学識の深さと研究に対する真摯な態度を十分に示した。

したがって本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。